

「天の民として生きる」

皆さん、おはようございます。1月も後半に入りましたが、お変わりないでしょうか？大阪では2度目の緊急事態宣言が発令されて10日が経ちましたが、町中の人々の動きは1回目と比べてそれほど減っていないような気がいたします。東京をはじめとする一都三県では、入院することの出来ない自宅療養者が3万5千人以上と報じられていますが、多くの人々の療養生活が支えられ、その命が守られ、回復へと導かれますように今朝もお祈りをしたいと思います。また、この一週間も医療現場と医療従事者の方々によるお働きが支えられますようにと切にお祈りを致します。

「復活の章」と言われる第一コリント書15章を5回に区分し、本日の15章35節~49節は4回目となります。本章の前半部分においてはキリストの復活の重要性とその意義について、また死者のよみがえりを否定する者たちに対するパウロによる弁明の言葉が述べられていました。パウロはこの所において「もし、私が人間的な動機から、エペソで獣と戦ったのなら、何の益があるでしょう。もし、死者の復活がないのなら、『あすは死ぬのだ。さあ、飲み食いしようではないか』ということになるのです。」(32節)と語っており、日々、肉体的な危機にさらされていると告げていました。この「エフェソで獣と戦った」というのは、文字通り、実際に彼が闘技場で野獣と闘ったということの意味しているのではなく、おそらくアジア州においてパウロが遭遇した様々な困難や危険のことをさしているのだと思われます。もしキリストの復活がないとするならば、福音宣教に伴うそれらの命がけの労苦は、全て無意味になるばかりか、多くのキリスト者はその反動で現世的かつ刹那的な行動に走るであろうと述べています。「悪いつきあいは、良い習慣を台なしにする」(33節)との言葉は、当時良く知られていたギリシャ圏でのことわざであるとも言われていますが、死者の復活を否定する人たちの悪影響を受けることによって、自堕落的な生活に生活に陥ることのないようにと警告を発しています。

本日の15章35節以降49節まででは、死者の復活を否定する者たちの2つの問いに対するパウロの応答として、復活の体の性格について述べられています。その2つの質問の最初の問いというのは、「死者は、どのようにして復活するのか？」との問いであります。パウロはこの質問に対して、種まきの様子に喩えてこのように説明しています。「何でそんな愚かな質問をするんですか。畑を見れば、分かるではありませんか。蒔いた種は、まず死ななければ(地に落ちなければ)、決して芽を出すことはありません。そして、その種から出てくる青々とした緑の芽は、初めの種とは全く別物です。つまり、地面に蒔く種というのは、麦でも何でも、干からびた小さな種粒です。様々な種類の種から各々の植物が芽を出し、成長するように、神様は私たちそれぞれにふさわしい、美しく新たな体を与えて下さるのです。」とパウロは語っています。続いて彼は、生き物の世界に目を転じて「どの肉も同じ肉だというわけではなく、人間の肉、獣の肉、鳥の肉、魚の肉と、それぞれ違います。」(39節)と述べており、それぞれの被造物が、創造主なる神様によって造られた創造の目的に適った体が与えられていることを指摘しています。さらにパウロは地上から天上に視点を移して、「天上のからだと地上のからだ」(40節)の違いについて語り、異なるからだは、異なる方法と形で、その輝きを放っていると告げています。つまり、太陽には太陽の輝きがあり、月や星には別の輝きがあると言うのであります。

今から10年前の新潟時代、海岸沿いや見渡す限りの田園地帯を車で通っている時に、目に焼き付くような夕日にうっとりしてしまうことがしばしばありました。関西の知人が新潟まで遊びに来られた際に、ぜひともその光景を目に焼き付けておきたいとのことで、その時間帯に合わせて私たち家族と共に海岸線のコースをドライブしたことがありました。ちょうどタイミング良く夕日が沈む瞬間に立ち合うことができ、当時の記念写真を見ますと、みなが茜色に染まる夕日の眩しさに目を細めている様子が残っていました。

使徒パウロは、太陽や月、星、その個々の星の大きさによっても輝きが異なるのと同様に、死者の復活の様子もこれと同じであると述べています(40節)。死後に朽ち果ててしまう私たちの肉体は、復活の際に与えられる体とは異質なものである、現在の私たちの肉体は病や死を避けて通ることの出来ず、私たちを一生涯悩まし続けるが、復活の体は決して朽ちることがありません。復活の時、それは眩いばかりの主の栄光に満ちたものとなるからです。確かに今は弱き肉体ですが、復活の時には、力に満ち溢れた朽ちることのない体に変えられるのです、と告げているのであります。

続く44節には、死者の復活を否定する者たちの2つ目の質問である「…どのような体で来るのか?」(35節)との問いに対するパウロの応答とも言える言葉が書かれています。「肉のからだでまかれ、霊のからだによりみかえるのである。肉のからだがあるのだから、霊のからだもあるわけである。」とあります。つまり、今はやがて朽ちるべき肉体に過ぎないが、復活の時には、神から与えられる超自然の体に変えられます。自然のままの私たちの体があるように、神からの超自然の体(霊の体)も存在するのですと、パウロは教えているのであります。45節以降49節までは、全人類の代表とも言える2人の人物を比較しながら、復活の体がいかなるものであるのかについて解き明かしています。この場面で登場する最初の人物はアダムであります。旧約の創世記2章に登場する、あのアダムのことではありますが、アダムの誕生に関して記者は「…神である主は土地のちりて人を形作り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は生きものとなった。」(創世記2章7節)と記しています。つまり聖書によれば、最初の人間であるアダムは、土(アダマー)から造られ、神のかたちに似せて、神にかたどって創造されたと言うのであります。それ故、パウロは「最初の人は土ででき、地に属する者であり…」(47節)と述べており、エデンの園におけるアダムの墮罪により、罪がこの世界に入り、その結果である死が全人類に入り込んだのであると告げています(ローマ書5章12節)。その一方において、「…第二の人は天に属する者です。」と、パウロが語るところの後者の人物というのは、死に打ち勝たれたイエス・キリストのことをさしています。病死したラザロを死後4日目にして蘇らせ、ご自身も人類の罪を贖うために十字架におかかりになり、死後3日目に墓の中より蘇られた主イエスのことをさしています。パウロはこの所において、最初のアダムに対して、主イエスのことを最後のアダムと呼んでおり、最初のアダムによってこの世界と人類に罪と死がもたらされたが、最後のアダムであるキリストによって、私たちに罪からの救いと共に、決して朽ちることのない永遠の命が与えられたのであると告げています。「私たちは土で造られた者のかたちを持っていたように、天上のかたちをも持つのです」(49節)と、パウロがここで語っているように、現代の私たちも本日のこの箇所から天に属する者とされていることを改めて心に留めたいと思います。キリスト者はこの地上にありながら、この世のものではない、との聖書のメッセージに思いを巡らしたいと思います。

「…わたしたちの国籍は天にある。そこから、救主、主イエス・キリストの来られるのを、わたしたちは待ち望んでいる。」(フィリピ書3章20節)とあるように、やがて朽ちることのない霊の体を与えられることを信じて、この地上における信仰の旅路を歩み続けてゆきたいと思います。

今日から始まる新たな一週間も、主のお守りとお支えのうちに健やかな日々でありますように祈ります。私たちを取り巻く社会とこの世界が、一日でも早く元の日常を取り戻すことが出来ますように祈り続けて参りたいと思います。